

ミニ診療室

地域医療を目指して

自治医科大学地域医療学講師 井上和男

私は、自治医科大学の地域医療学に勤務しています。そこは、日本においてへき地などの地域医療を担う医師を養成すべく設立されました。そこで、まず地域医療について説明したいと思います。それは、ひとことでは「地域の必要性に応じた医療を提供する。」ということです。現在の日本の医療は、内科や外科などの科別、あるいは消化器や循環器などの内臓別に細分化される傾向が強く、どちらかというと大きな病院での医療に対応していると思います。ところが診療所などでは多くの人々が多彩な悩みを持って一人の医師を訪れます。高血圧、糖尿病などの成人病はもとより、腰痛、湿疹、中耳炎、肩凝り、水虫などさまざまです。なかには「ウオノメが痛いからなんとかしてくれ。」とか、「目にごみが入ってとれない。」というようなものまであります。要するに何でも来るわけです。そして一人の患者さんにいろんな症状や病気があるのがふつうです。そうした日常にみられる多彩な病気や悩みに対して医師は対応しなければなりません。そして必要があれば速やかに専門医に紹介することも必要です。地域に求められる医師とは、さまざまな患者に対して適切な知識を持ち、自分で診療するにせよ紹介するにせよ、患者さんにとっても最も良い方向に医療サービスを組み立てていく医師のことです。

それでは、地域医療を担う医師を確保するにはどうすればよいのでしょうか。

まず、「長続きする医師の勤務環境を作る。」です。現在でも特にへき地では医師が不足しており、この傾向はすぐには改善されそうもありません。若い医師も都市部の病院などでの勤務を希望する者が多いようです。地域での勤務には魅力もありますが、いくつか問題点があるのも事実です。そこで新しく医師が地域医

療に参加し、また続けていく為には、勉強をしたいときには研修に行け、休みがとれ、家族とくつろげ、医師自身やその家族が病気になっても安心して治療に専念できる体制がどうしても必要だと思います。こうした体制ができれば、地域医療に参加しようとする若い医師も増えてくるのではないかと思います。具体的には代診医（病気などのときに支援する医師）の確保、勤務医師数の適正化（現在はあきらかに不足）、生涯研修の充実などです。

つぎに「家庭医の制度を充実させる」ことです。日常の診療は家庭医が行い、必要に応じて専門医に紹介し、その後も家庭医が継続的に診療していくという役割分担はなされるべきです。いま言われている「薬漬け検査漬け」医療の改善には、こうしたかかりつけのお医者さんと専門医の役割分担がどうしても必要だと思います。患者さんにとっても、自分のかかりつけの医師を持つことは、いままでかかった病気や普段の体の状態を知ってもらえるわけですから、長い目で見れば非常に良いことだと思います。このためには、家庭医の養成制度が確立することが必要です。

まさに「地域医療」を確立すべく地域医療学では、こうしたことを目指して私を含め多くの仲間が働いています。

